

実践には想像力が欠かせない

上 廣 哲 治

「古池や蛙飛びこむ水の音」——言わずと知れた松尾芭蕉の名句です。「何か知っている俳句がありませんか」と聞かれたら、真つ先にこの句を挙げる人も多いと思います。では、なぜこの句はそれほどまでに親しまれてきたのでしょうか。句歴四十年という知人に尋ねてみると、しばし天を仰いだ末に、次のような答えを返してくれました。「限られた言葉の間に絶妙な余白があつて、それがさまざまな情景を思い起こさせてくれるからではないだろうか」。

知人によれば、ここに記されているのは、古い池がある、カエルが飛び込んだ、水の音がしたという大まかな事実だけで、どんな形の池なのか、どれほどの大きさのカエルなのか、どのような音がしたのかといった「詳しい情報」はいっさい省かれています。しかし、その欠落こそが、さまざまな情景を思い起こさせる余地を与えているのではないか。「余白」があるからこそ、私たちの想像力は勢いを得て、自由に動き回ることができるとは思いません。

それが句の解釈として正しいかどうかはさておき、知人の説明を聞きながら、私は実践倫理が掲げる理念と具体的な実践との関係について、思いをめぐらせていました。

ご存じのように、実践倫理には基本理念を表すさまざまなキーワードがあります。「大自然の摂理」「家庭愛和」「共生」「現実大肯定」「気付き即行」「我も人ももの仕合わせ」などです。これらはもちろん、皆さんの思考や行動を一定の型にはめたり、規制したりするものではありません。いずれも、日々をより善く生きるための大まかな方向性を示すものではありませんが、「こうしなければならぬ」とか「あつてはダメだ」などと、こまごました指示を出しているわけではないのです。

言い換えれば、私たちが掲げるさまざまな指針は、会友の皆さんがそれぞれの経験や知見に応じて、自由な発想で実践に臨んでいくための、おおよその手引きにすぎません。先に挙げた芭蕉の句のように、実践倫理の課題には自由に解釈できる「余白」があるからこそ、想像力を大いに働かせることができ、それぞれの立場に応じた実践を生み出すことができるのです。

ところが、「自由な発想」などというと、とたんに尻込みをしてしまい、何か具体的な実践課題を示してほしいと求める人が出てきます。実は、多くの人が苦手としているのが、想像力を働かせて自らの課題を見出すことなのです。指示を出してもらえれば、そのとおりのことができちんとできるのに、指示がないと何をやっていいのかわからない、いわゆる「マニュアル人間」や「指示待ち人間」が増えていくように感じられます。

仕事や作業を正確に行い、効率化を図るためには、マニュアルや細やかな指示が必要とされるのは当然のことです。しかし、それがさまざまな局面で常態化していくと、人は自分の頭で考えることを放棄し、もっぱら「上」からの指示を待つようになってしまいます。そのような状態で、マニュアルにない

想定外のことが起きようものなら、パニックに陥るか、茫然と立ち尽くすほかなくなるのです。そうした傾向は、世の中が便利になればなるほど強まっているように思います。

身近なところでは、日々の食事づくりにも同様の傾向が見られます。最近では、スマートフォンやパソコンで検索すれば、あらゆる料理のレシピを見ることができるようになりました。とても便利になったのですが、そのぶんレシピに依存してしまい、レシピなしでは何もできない人が多くなっているといえます。水の量から醤油やみりんの量まで、きっちり指示に従うけれど、自分の舌で味を確かめることをしない人が増えているというのです。

ふだん料理をほとんどしないお父さんが、肉じゃがをつくるために材料を買って帰ったところ、レシピにある（しかし、なくてもいい）しらすを忘れてしまい、わざわざ車で買いに走ったという話を聞いたことがあります。この話にはオチがついていて、しらすが好き嫌いな息子さんはそれを丁寧に取りのぞきながら食べていたのだそうです。

想像力の欠如という現象は、子どもたちの世界にも広がっています。ドイツの作家ミヒャエル・エンデが著した児童文学『モモ』には、それを象徴するような場面が描かれています。

主人公の少女モモが住む円形劇場の廃墟には、大都会から多くの子どもたちが集まってくるようになります。都会では、「時間どろぼう」の策略によって「時間の節約」（あらゆるものごとの効率化）が進められており、子どもたちにとって円形劇場は、そうした動向から逃れるための隠れ家になっていたのです。しかし、この子どもたちはすでに、「まるつきり遊ぶということのできない子」になっていました。彼らを持つてくるおもちゃは、「遠隔操作で走らせることのできる戦車」など、それ以外のことに

は役に立たないようなものばかり。「こまかなところまでいたれりつくせりに完成されているため、子どもがじぶんで空想を働かせる余地がまったくない」ものだったのです。

「子どもたちはなん時間もじつとすわったきり、ガタガタ、ギーギー、ブンブンとせわしなく動きまわるおもちゃのとりこになって、それでいてほんとうはたいくつして、ながめてばかりいます——けれども頭のほうはからっぽで、ちっとも働いていないのです。ですからけつきよく子どもたちは、むかしながらの遊びにまたまいることになりません。これなら、二つか三つの木箱とか、やぶれたテーブルかけとか、モグラが盛りあげた土の山とか、ひとすくいの小石とかがあれば充分で、あとはなんなりと空想の力でおぎなうことができるのです」（大島かおり訳）

精緻に完成された「戦車」のおもちゃには、戦車のミニチュアとしての働きしかないけれど、ただの木箱は、遊びの中身に応じて、建物にもベッドにも、ときには車にも変わることができます。それを可能にするのは想像力であり、想像力を膨らませるからこそ遊びは楽しいものになるのです。

私たちの実践も、同じではないでしょうか。たとえば、「家庭愛和」という課題には「家族の一人ひとりが互いに愛し合い、家庭内での自分の役割を精いっぱい果たす」といった大まかな指針があります。が、実践についてのマニュアルがあるわけではありません。しかも家族のかたちは、昔ながらの大家族からひとり親家族までさまざまですから、それぞれに応じた多様な実践の道があるはずなのです。

では、何をもって「あるべき実践」とすればよいのでしょうか。ひとつは、多くの体験談に耳を傾けてみることに。もうひとつは、木箱で遊びを考案するように、状況に応じて想像力を膨らませ、自分自身で答えを見つけていくことです。そして、そこにこそ真の実践の楽しみがあるのです。